

「教材の基本的な方向性について（案）」に対する意見

当然のことですが、教材を作成する際には「それにより子どもにどうなって欲しいのか」を明確にすることが大切です。その意味で「義務教育の場面において、二度と薬害を起こさないためにどのようにすれば良いかということについて、子どもたちが考えるきっかけを提供する」だけでは、やや曖昧だと感じます。

配付する教材で中学生に求めることが可能なのは、

- 1 薬害に関心を持つ。
- 2 薬害を中学生なりに知る。
- 3 薬害に関して自分なりに考えてみる。

くらいなのではないかと私は考えます。

「1 薬害に関心を持つ。」という面では、「現に薬害の被害者がいて、苦しんでいる」「薬害はこれからも起こりうることであり、自分や家族なども被害者になり得る」ということが重要だと思います（後者はこの検討会では受け入れがたいことなのかもしれませんが、おそらく正しいことですし、逆に、もしそうでないなら、学ぶ意味は少ないのではないのでしょうか）。関心を持ってもらうためには、中学生が自分に置き換えてイメージできるような事例（被害者が年齢的に近い、あるいは、自分の環境や行動に近い状況で被害にあっているなど）があるとよいと考えます。

「2 薬害を中学生なりに知る。」に関しては、中学生レベルで、薬害に関してどのようなことを知ればよいのかということが問題となりますが、この教材の趣旨からいって、薬害の定義などよりも、事実として起きたこと（患者の苦しみも含む実態）が大切だと考えられます。また、なぜ起きてしまったかを中学生なりに理解させる必要もあるでしょう。ただ、後者は、中学生の理解力（例えば、リスクを受け入れた上で活用するということ、さらに言えば、そのリスクには死者が出るような大きなものも可能性として含まれることが理解できるでしょうか）や薬害の起こる複雑な構造（前述のことに加え、経済的、政治的、行政的なことが関連します）からするとなかなか難しいことだと思います。なぜ起きてしまったのかに関してすべて書くのではなく、中学生が理解でき、また、学ぶに足ることに限定する必要がありますが、そのこと自体がこの検討会では難しいのかもしれませんが。

医薬品自体に関しては、その役割や歴史に関して簡単に触れることはあってもよいと考えますが、副作用や正しい使用法に触れると混乱を招く可能性もあると思います。「医薬品は人間の叡智によりこれまで進歩してきた、命や健康への様々な貢献を果たしてきた。

しかし、一方で、大きな問題も引き起こしてきた。その一つが薬害である。」くらいのイメージでしょうか。

「3 薬害に関して自分なりに考えてみる。」には、もちろん「調べ学習」的なものもよいのですが、中学生が「どうしてだろう」「どうしたらよいのだろう」と考えてしまうような課題ないし発問が欲しいと思います。しかし、このこともすでに述べた理由で難しいのかもしれませんが。